

池波正太郎

鬼平犯科帳

7





文春文庫

142—19

鬼平犯科帳(七)

定価はカバーに
表示してあります

1981年2月25日 第1刷

1985年11月1日 第11刷

著者 池波正太郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文春文庫

鬼平犯科帳
(七)

池波正太郎



文藝春秋

目次

雨乞い庄右衛門

7

隠居金七百両

41

はさみ撃ち

75

搔掘のおけい

110

泥鰯の和助始末

144

寒月六間堀

213

盗賊婚礼

250

解説——中島梓

293

鬼平犯科帳

(七)

雨乞い庄右衛門あまご しょうえもん

一

夕暮れから、たたきつけるような豪雨となった。

その雨の中で、お照と伊太郎は夕餉ゆうげの膳ぜんにつき、酒をのみはじめたのであるが……。

若い躰からだにまわってくる酔いを、屋根打つ激しい雨音がそそりたて、伊太郎が見る見る昂奮きうふんしてきた。

それと見ながら、そ知らぬ顔で、

「この雨がやむと、また、朝晩が冷えこむねえ」

ひとりごとのようにいい、盃さかを置いてお照は、髪へ手をやった。

わざと高くあげた右腕の腋わきの、くろぐろと陰ったあたりへ、伊太郎の眼が吸いよせられている。

夏は去っていたが、

「あたしの躰は、いつも火照^{ほて}っているものだから……」

といい、お照は単衣^{ひとえ}一枚でえりもとをくつろげ、むっちりと脹^はった乳房の上部をのぞかせては伊太郎をさそいこむのであった。

伊太郎の喉^{のど}が、ぐくりと鳴った。

伊太郎の手から、盃が音をたてて膳へ落ちた。

お照は眼で笑い、

「酔ったよう、今夜は……」

寝そべって、手まぐらをしながら、

「伊太郎。煙管^{きせる}を取っておくれな」

伊太郎が煙草盆と煙管を取り、お照の背後から差し出した。

身をよじって、煙管へ手をかけたお照へ、伊太郎が飛びついてきた。

「あれ、何をするのさ」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

うわごとのようにいいつつ、伊太郎はお照を抱きしめ、はだけた胸肌へ顔を押しつけてくる。伊太郎の濃いひげあとが乳首にふれると、たまりかねたお照も双腕をのばして伊太郎のくびすじを抱えこみ、

「そんなに、好きかえ、あたしのことが……」

「好きだ、好きだ……」

このところ、十日ほどは伊太郎を遠ざけていたお照だけに、男の獣けもののような若い体臭を嗅かぐと、われを忘れた。

「伊太郎。今夜は、あたしの好きにするからね」

はね起きて伊太郎を押し倒し、右手で男の着物をはぎとりながら、
「うんといじめてやる。だから、今夜は覚悟をおし」

もどかしげに、お照は左手で自分の帯を解きはじめた。

……二人が、裸身をぐったりと畳の上へ投げ出したとき、雨はやんでいた。
雨がやんでいることに、そのとき二人は、はじめて気づいた。

「あ……」

お照が、汗まみれの半身を起した。

表の戸を、ひそかにたたき音をきいたからである。

お照が目くばせをすると、伊太郎は出ていた膳を素早く台所へ片づけ、そのまま、あらわれてこなくなった。裏口から外へ去ったらしい。

また、だれかが戸をたたく。

「どなた？」

手早く、身じまいをしながら、お照は座敷の中を見まわし、小窓をひらいて外をのぞいた。
表の戸口に、人影がひとつ。

「あれまあ……」

すぐに、お照は表の戸を開けた。

「わしの戸のたたき方を、忘れてしまったのじゃあ困るね」

と、入って来た老人が苦笑をうかべた。

ぜいたくな品のよい身なりをしている老人は、深川・小松町の眼鏡師・半兵衛の名でとおっている。お照は、半兵衛の妾めかけとして、この浅草・阿部川町に住み、月に三度ほど、半兵衛が通って来るのである。

阿部川町の称念寺裏の一角にある三間ほどの小さな家だが、塀へいにかこまれ、しゃれた造りで、以前は、元鳥越の華徳寺かどくの和尚わしやうの妾宅しやうたくであつたらしい。家主は、南新堀一丁目の瀬戸物問屋・豊島屋九右衛門であつた。

お照は、半兵衛を、自分が寝間にあてている奥の部屋へとおした。伊太郎を抱いていた部屋ではない。

「お酒でも、つけましようかね、おじさん」

と、お照がいった。

「いや、かまわないでおくんなさいよ」

と、半兵衛がこたえる。

旦那と妾との会話にしては、どうも妙なところがある。

お照が茶をいれて出す間、半兵衛は細い眼をなおさら細め、しずかに煙草を吸っていた。

年齢も六十に近いと見てよい。瘦せた小さな顔、躰であるが、血色はすこぶるよく、禿げあがつた頭へ、申しわけのような鬚がちょこなんと載っている。

「ずいぶんと辛抱をなさったろうが、間もなく、お頭が江戸へもどって来なさる」
つぶやくように、半兵衛がいった。

「まあ……」

お照の顔へ、一種の翳りがただようのを、半兵衛は半眼の底から見ぬいたけれども、そ知らぬ顔のまま、

「さぞ、お前さんも、うれしゅうござんしょうねえ」

「でも、ほんとなのかえ、おじさん」

「ほんとですともね。甲斐と駿河の境にある山の中の、なんとかいう温泉が躰に効いたらしい。お頭は、三年ぶりで江戸へもどり、最後の盗めをなさるおつもりらしい」

「最後の……」

「先刻ね。深川のわしの住居へ、お頭につきそって定七が着いてね」

「あれまあ……じゃ、ほんとうに？」

「最後の盗めを終えたなら、お頭は、お前さんをつれて故郷の甲州へ帰り、のんびりと余生を送ろうという……ふ、ふふ。おどろくだろうねえ。三年前には、まだまだむすめくさかったお前さんが、こんなに、こつてりとあぶらの乗った女になっているのを見たら、夢中になりすぎて、またぞろ病をぶりつ返さぬともかぎらねえ。せいぜい、気をつけておくんなさいよ」

「いやだねえ、おじさん……」

「ところで、お照さん……」

「え？」

「お前さんが、あの伊太郎と乳くり合っているのを知ったら、お頭はどんなおもしろいをしなさるかね」

お照は、だまった。

どうにか半兵衛の眼を、ごま化してきたつもりでいる一方では、

（うすうす、感づいているかも知れない……）

不安におもってもいた。

大盗・雨乞いの庄右衛門の「片腕」とよばれた鷺田^{さぎた}の半兵衛の、顔かたちからは想像もできぬ恐ろしさを、雨乞い一味の「引きこみ」をつとめてきたお照は、よくわきまえている。

眼を伏せたまま、あくまでも物しずかに煙草を吸っている半兵衛老人を凝視^{ぎょうし}し、お照は、

（もう、いけない……）

覚悟をきめぬわけにはゆかなかった。

山奥の温泉で病後を養っているお頭の妾が、その留守中に、しかも同じ一味の若者と情を通じ合ったからには、

（二人とも、生かしてはおけぬ）

のが、盗賊仲間のきびしい掟^{おきて}なのだ。

雨が、また、屋根をたたいてきた。

黙然と、煙草をつめかえては吸いつづけている鷺田の半兵衛の前で、お照の手足がわなわなとふるえはじめた。

やがて、煙管を置いた半兵衛の右手がふところへ差しこまれ、白鞘しらさやの短刀を引き出した。それを見たお照が火鉢の灰のような顔色がんしよくとなり、腰がぬけでもしたように、畳へくず折れた。お照は、もう逃げようとする気力さえうしなっていた。

二

その夜。

半兵衛やお照のお頭である雨乞いの庄右衛門は、早くも東海道・由井ゆいの宿場の旅籠はたご〔府中屋利助〕方へ泊っていたのである。

このことを、庄右衛門の使いとして江戸へ発たった定七も知ってはいない。

庄右衛門が、約三年の間、湯治につとめていた場所は、駿府すんぶ（現静岡市）から安倍川沿いに北へ十五里ほどのところにある梅ヶ島の温泉だ。

切り立った山肌と深い溪流にかこまれた岩の間から、こんこんとわき出る温泉は万病に効くといわれている。しかし、なんといっても山深いところゆえ、山小屋のような旅籠が一つあるだけで、そのようなところへ、大盗・雨乞いの庄右衛門ともあろうものが、よくも三年の間、凝じようと息をこらし、辛抱をしていたものだ。

庄右衛門は、梅ヶ島の上の安倍峠をこえて甲斐の国へ入り、富士川辺りへ下ったところの横根村で生まれた。だから、このあたりの様子にはくわしいし、少年のころ、父親につれられて梅ヶ島の温泉へ来たこともある。

父親が病死したのち、庄右衛門は母親と共に村を出て、東海道・吉原の宿場へ移った。母のみなが、吉原宿の桶屋・治郎八へ再婚をしたからであった。

そのころのことを、庄右衛門は、

「よくわからねえが、おふくろはずいぶんと苦勞をしたらしい。親父が死ぬと、親類どもが寄つてたかつて、おふくろとわしを村から追い出しにかかったそうな」

と、お照へ語ったことがある。

ところが、その母親も再婚した翌年に、ぼっくりと死んでしまい、義父の桶屋は三度目の女房をもらった。この女房が、すぐにまた子を生む。先妻の子と二度目の女房の子の庄右衛門がいるわけだから、家の中にもめごとが絶えない。庄右衛門がたまりかねて家出をしたのは、十七歳の夏のこと、そのころ彼は義父に仕込まれた桶つくりも、どうにか手に入ってきていた。

それからの庄右衛門は、諸国を放浪したのち、二十二歳の春に、盗賊界でその名をうたわれた大盗・夜兎ようぎの角右衛門（先代）の配下となり、忠実にはたらくこと十余年にして、角右衛門から独立をゆるされた。

その折、角右衛門が、

「右腕とおもいねえ」

こういつて、つけてよこしてくれたのが、鷺田の半兵衛なのである。

（おれが、ひとりで江戸へもどって行ったら、半兵衛もお照も、びっくりするにちげえねえ。ほんにわれながら、この手足が自由になろうとは、おもいもかけなかったものなあ……）

由井の「府中屋」の奥座敷で、湯あがりの躰を寢床へ横たえ、雨乞いの庄右衛門はしみじみとそうおもった。

四年前の冬……。

庄右衛門は、鷺田の半兵衛以下十五名の配下を引きつれ、江戸の芝・浜松町の蠟燭問屋ろうそく「宮本屋利助」方へ押し入り、金八百七十余両を盗みとって逃走した。

この仕事は二年がかりの準備をおこなった上での盗みで、例によって庄右衛門は一人の殺傷もしていない。

それから庄右衛門は、東海道・藤枝に近い下ノ郷という村にある「盗人宿」へ行き、妾のお照と共に暮すうち、発病をした。

五十をこえた庄右衛門だが、女房も子もなかった。

「この稼業に、そんなものはいらねえ」

というのが信念で、だから、これまでにお照のような女を何人もこしらえてはいても、女房にしたことはない。子供は二人ほど生まれているそうだが、いずれも大金をつけて他人の子にしまった。

庄右衛門の病気は、関節炎と心臓である。一時は死ぬか、とおもわれたほどだが、下ノ郷の隠